ボクはハチダーマンＪｒ！

ほしの☆すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボクはハチダーマンＪｒ！

【Ｎコード】
Ｎ９６２９Ｄ

【作者名】
ほしの☆すばる

【あらすじ】
いじめられっこのサトルは、学校の帰り道に自称・正義の味方『ハチダーマン』の正体を見てしまう。

ボクは学校が大きらいだった。
それはなぜかというと、五年生になってから同じクラスになったヒロキがボクのことをいじめるからだ。
下校時間になると、ボクは急いで教室を飛び出す。
「おい、サトル！」
ヒロキの声が聞こえたけど、ボクは聞こえないフリをした。
「待てよ！」
ヒロキが追いかけてくる、
ボクはこわくなって一生けん命走った。追いつかれたらまたいじめられる。
ボクは家と家の間のせまい道に入った。体の大きいヒロキは入ってこられないから、ここに隠れていれば見つからないはずだ。
ボクはそこでヒロキが通り過ぎていくのをじっと待った。
しばらくしてヒロキが通り過ぎていく。
でも、ボクはすぐには動かなかった。だって、ボクをさがして引き返してくるかもしれないから。
ボクは空を見上げた。雲がどんどん流されていく。じっとしていると、風が吹いてきて寒くなった。
ねえ、神様。どうしてボクだけがこんな悲しい思いをしなきゃいけないのかな？　ボク、何か悪いことでもしたのかな？

ボクは悲しくなってきて泣いた。せまい道にはさまれてずっとずっと泣いていた。
「ボク、そんなところで何しているの？　はさまれて出られなくなったの？」
家の窓から知らないおばさんが顔を出していた。きっとボクの泣き声が聞こえたんだ。
ボクは急にはずかしくなった。
「ちがうよ。ごめんなさい！」
ボクは入った方とは反対側の道へと抜け出した。
すると、スーツを着たおじさんが変なマスクをぬいで大きなカバンの中に入れていた。
ボクは直感した。
見てはいけないものを見てしまった、と。
ボクは来た道をそっと引き返そうとした。

バキっ！

そういう時にかぎって、いつもは落ちていないはずの小枝をふんだりするもんなんだ。
おじさんがハッとなってボクの方を見る。
おじさんは顔に青すじを立てていた。
「もしかして見たのか？」
「何も見てないよ。その大きなカバンの中に変なマスクが入っているなんて全然知らないから」
ボクは首がもげるんじゃないかと思うくらいぶるんぶるんと横にふった。
「見ちまったのかーっ？」
おじさんはこの世の終わりみたいな顔をしていた。

「変身解除を見られてしまうとは、一生の不覚だーっ！」
おじさんは涙を流しながら叫んだ。かと思ったらあっさりと泣くのをやめた。
「すんでしまったことを悔やんでも始まらん。人間、前向きに生きていくことが大切だ！」
おじさんはカバンの中から何かを取り出すと、ボクの右手ににぎらせた。見てみると、
それはハチの形をしたバッチだった。
「何、これ？」
「これはハチダーマンの証だ」
「ハチダーマン？」
「そう！　君は今日から正義のヒーロー、ハチダーマンの仲間として、オレといっしょに
この虹ヶ丘のご町内の人々を守るために戦う
のだっ！」
おじさんはテレビのヒーローみたいな決めポーズを決めると、大きな声で笑った。
「何がハチダーマンだよ。ボクのことは全然守ってくれなかったくせに！」
ボクはバッチをおじさんになげつけた。
「少年、何か困ったことでもあったのか？」
「ボクはいつもヒロキにいじめられているのに、おじさんは助けにきてくれたことなんか
ないじゃないか！」
「おじさんだぁ？」
おじさんは急にひきつった顔になると、ボクの顔を両手ではさみこんだ。今のボクの顔
はきっとタコみたいにくちびるをとんがらせているんだろうなぁ。
「誰がおじさんだって？　おにいさんはまだ三十才前の花の独身貴族なんだぞ！」

つまりこのおじさんも『おじさん』と呼ばれることをいやがる微妙な年頃ってわけだね。
そういえば、お母さんもスーパーのおじさんに『キレイなおねえさん』なんて呼ばれてすごく喜んでいっぱい買い物していたもんなぁ。
こんな小さなことを気にする人に、助けを求めた自分が悲しくなってきた。時間のムダだ。さっさと家に帰って、昨日のゲームの続きをやろう。
けど、ボクの顔をはさんでいる手をはなしてもらわないとどうすることもできない。
「ごめんなさい、おにいさん」
ボクがそう言うと、おじさん……もとい、おにいさんはにっこりと笑って手をはなしてくれた。
「じゃあ、さようなら」
ボクはぺこりとおじぎして家に帰ろうとした。

「ちょっと待て、少年！」
おにいさんがボクの右手をしっかりとつかんできた。
「知らない人と話ししちゃいけないって、先生に言われいてるから」
「今まで話しておいて、いきなり先生の言うことときいてんじゃないぞ」
意外とするどいところをついてくるなぁ。
「オレの名前は、一文字タケシ。仮の姿は普通のサラリーマンだ。自己紹介はすんだ。これでもう知らない人じゃないだろう！」
いや、名前を知ったからって、大丈夫とはかぎらないんだけど。っていうか、仮の姿っていうのは何？
「少年、名前は？」

「サトル」
「何年生だ？」
「小学五年生」
「小五だったらいじめられてばっかりいないでやりかえしたらいいだろう」
　おにいさんはボクがなげつけたバッチを拾って、またボクの右手ににぎらせた。
「ヒロキは空手を習っているから、クラスで一番強いんだ」
「そんなことは関係ない。戦ってみてこぶしとこぶしでわかりあう！　そこから男の友情ってのは生まれくるもんなんだっ！」
　おにいさんは親指を立てて、きらーんと白い歯を見せた。そんな言葉をはずかしがることなく、よく真剣な顔で言えちゃうもんだなぁ。聞いているこっちがはずかしくなってくるよ。
「オレだって子供の頃はいじめられっ子だったんだ。だが、正義のヒーローと出会ってからオレは生まれ変わったんだ！　サトル、お前も今日からハチダーマンＪｒ（ジュニア）として生まれ変わるんだっ！」
　話がふりだしに戻った気がするんだけど。結局は何も解決していない。

「ひとつ質問なんだけど。ライオンやオオカミとかかっこよくて強そうな動物はいっぱいいるのに、どうしてハチなの？」
　ボクがそう聞くと、おにいさんは一すじの涙をこぼした。
「オレは子供の頃からはちみつが大すきだったんだ！　おいしいはちみちが食べられるのはおいしい蜜を運んでくるみつばちのおかげ

だ！　それなのに、ハチはいつも正義のヒーローにやられる悪役ばかりだ。だから、オレはみんなが思っているハチの悪いイメージを変えてやりたかったんだーっ！」

おにいさんは青空に向かって叫んだ。何だかテレビドラマに出てくる熱血先生みたいだ。

「というわけで、これからパトロールに行くぞ」

「これから？　ボク、家に帰って宿題終わらせてゲームの続きがやりたいんだけど」

「ゲームだぁ？　そんなのばっかりやってるからもやしみたいにひょろひょろになるんだよ！　子供はやっぱり外で元気良く遊ばないとな」

おにいさんはそう言って、いやがるボクの手を強引に引っ張った。

ボクが最初につれてこられたのは、通学路の交差点だった。ボクはここを通らないから知らなかったけど、信号がないのに車がいっぱい走っていてなかなか渡ることができないから危ないなぁ。今も渡ることのできない生徒たちが何人かいる。きっと一年生だ。

「よし、変身するぞ」

「え、変身って？」

おにいさんは周りをキョロキョロしながら、細い道へと入っていく。ボクはここでもおにいさんに引っ張られる。不審者がいますって、今すぐにでも警察に通報されたっておかしくない状況だ。けど、おにいさんはそんなことおかまいなしで、

カバンの中から例のマスクを取り出す。そして、右手と左手を高く上げてクロスさせると叫んだ。

「クロースチェーンジ、ハチダーマン！」

おにいさんはマスクをかぶると、スーツを脱ぎ始める。下には、ハチ模様の全身タイツみたいなのを着ていた。首には赤いマフラーを巻いている。これって、どう見たって正義のヒーローってより、悪役プロレスラーって感じなんだけど。

正直、センスをうたがう。

「ハチダーマン、降臨！　とぉっ！」

おにいさんはその場で大きくジャンプして決めポーズを取る。

「さあ、サトルも変身だ！」

おにいさんはカバンの中からもうひとつのマスクを取り出した。

「いやだよ、ボク。そんなのかぶりたくないよ！」

「何を言っているんだ。正義のヒーローは素顔を知られるわけにはいかないんだ。正体がバレると身内が悪の秘密結社にねらわれてしまう危険性がある。だから、恋人にですら秘密にしておかなければならないんだ。そして、変身後は必ずハチダーマンと呼ぶこと。それがヒーローの鉄則なんだ！」

おにいさん……いや、ハチダーマンは無理矢理ボクにマスクをかぶせた。

「よく似合ってるぞ、Ｊｒ（ジュニア）」

「これ、大きいんだけど」

「しょうがない。それはオレのスペアマスクだからな。明日にはお前にピッタリのマスク

とユニフォームを作ってきてやるから」
「それだけは絶対にいらないよ」
ボクにしては珍しくハッキリと断れた。だけど、ハチダーマンはそんなこと聞いてはいなかった。
「行くぞ、Ｊｒ（ジュニア）！」
ハチダーマンはいまだに横断歩道を渡ることのできない一年生たちの所へ走っていった。
もちろん、いやがるボクの手を引っ張りながら。

「君たち、困っているようだね」
「あ、ハチダーマンだぁ！」
一年生たちが口をそろえていっせいに言った。まさかハチダーマンを知ってる子たちがいたなんて、ボクには信じられなかった。
「そんな時は、このハチダーマンにお任せだ！」
ハチダーマンは人差し指を立てると、走ってくる車の前に飛び出していった。
「あぶない！」
ボクは思わず目を閉じた。車が急ブレーキをかける音が聞こえた。
「おーい、Ｊｒ（ジュニア）。旗を持ってその子たちを早く渡らせてやってくれ」
ハチダーマンの声に、ボクは目を開けた。
車はハチダーマンによって止められていた。ムチャクチャな人だなぁ。車が止まってくれなかったら引かれていたっていうのに。
「はい、おにいちゃん」
ボクが動かないでいると、一年生の子が旗を手渡ししてくれた。
気がつけば、みんながじーっとボクの方を見ている。
はずかしい。

はずかしすぎてこのまま走ってにげだしたい。だけど、一年生たちはかっこわるいって目でボクを見てはいかなかった。どっちかっていうと、かっこいいっていうあこがれの目でボクを見ている。そういえば、ボクも一年生の時はヒーローって本当にいるんだって信じてたっけ。でも、それはテレビの中だけなんだって知ってすごくショックだったんだ。見た目はどうであれ、この子たちは信じているんだ。正義のヒーローは本当にいるんだって。

そう思ったら、ボクの中からはずかしいという気持ちは消えていった。

ボクは旗を持って、横断歩道を渡っていた。

無事に渡ることのできた一年生たちは、手を高く上げてハチダーマンにお礼を言っていた。

「Ｊｒ（ジュニア）もありがとう！」

ボクにもお礼を言ってくれた。何だか胸がじーんと熱くなった気がした。

「初任務ごくろうだったな」

ハチダーマンがボクの頭をなでてくれた。

「よし、次に行くぞ！」

「えっ、まだやるの？」

「当たり前だ。正義のヒーローは忙しいんだ。ほら、見てみろ。あそこに荷物をいっぱい持っているお年寄りがいるだろう」

ボクはハチダーマンが指差す方向を見た。

確かに道路の向こうでは、おばあさんが両手にスーパーの袋を持って重そうに歩いてい

る。

「とぉ！」

ハチダーマンはその場で大きくジャンプすると、おばあさんの所へ走っていった。仕方なくボクもついていく。

「重いでしょう？　私が家までお持ちいたしましょう」

「あら、ハチダーマンさん。いつもすいませんねぇ」

ハチダーマンって、おばあさんにまで知られてるんだ。けっこう有名人なんだなぁ。

「Ｊｒ（ジュニア）、君はこれを」

ハチダーマンは大きい袋を持つと、小さい袋をボクに渡してくる。小さいっていっても、けっこう重いなぁ。

「おやまあ。今日は小さいハチダーマンさんもいっしょなんだねぇ。重いけど、大丈夫かい？」

「大丈夫だよ！」

ボクはおばあさんに心配をかけたくないから、元気にそう答えた。

おばあさんの家はそんなに遠くなかったので、すぐについた。

「いつもありがとうねぇ。はい、これ飲んでちょうだい」

おばあさんはスーパーの袋から缶ジュースを出してくれた。

「それは受け取るわけにはいきませんよ。ヒーローとして当たり前のことをしただけですから」

ハチダーマンはきっぱりと断った。

「ねえ。どうしてもらわなかったの？」

おばあさんの家を出てから、ボクはハチダーマンに聞いてみた。

「オレは何かがほしくて正義のヒーローをやっているわけじゃないからな。ただ……」

「ただ……？」
ハチダーマンはその続きを教えてはくれなかった。
「おっと、もう日がくれてきたな。Ｊｒ（ジュニア）はもう家に帰っていいぞ」
「ハチダーマンは？」
「オレはまだやるべきことがいっぱいあるからな」
どこかで困っている人をさがしにでも行くのかな？
「じゃあ、これ返すよ」
ボクはマスクを取ると、ハチダーマンに差し出す。
「いや、これはサトルが持っていてくれ。必要になる時があるかもしれないからな」
たぶんないと思うんだけど。でも、ハチダーマンは受け取ってはくれなかったので、
ボクはとりあえずズボンのポケットの中に押し込んだ。

帰り道でヒロキを見かけた。ボクはとっさにかくれた。
「あれ？」
よく見てみると、ヒロキは三人の中学生になぐられていた。きっとヒロキのことだから中学生にえらそうなこと言って怒らせたんだろうな。いくらヒロキが強いからって中学生三人を相手にして勝てるわけがないじゃないか。
いい気味だよ。ボクをいじめるからバチが当たったんだ。
でも、何だろう。このモヤモヤした気持ちは。確かにヒロキはキライだ。だけど、みんなで一人をいじめるのは何だかゆるせない。
ボクはズボンのポケットの中からハチダーマンのマスクを取り出す。

「クロスチェーンジ！」

ボクはハチダーマンのマスクをかぶると、ヒロキたちの所へ走った。

「何だよ、お前は？」

一番大きな中学生が聞いてきた。はっきり言ってこわかった。足もガクガクとふるえてる。心臓だってドキドキしてる。でも、ボクはハチのバッチをにぎりしめて叫んだ。

「ハチダーマンＪｒ（ジュニア）だ！」

「何だ、そりゃ？」

中学生たちはバカにして笑った。どうやら中学生には有名じゃなかったらしい。

「ケンカはやめろよ」

「あいつがケンカを売ってきたから買ってやったんだよ」

「だからって、みんなでなぐることないじゃないか！」

「なら、お前もいっしょになぐってやろうか？」

中学生たちが指をボキボキとならす。

早くもピンチだった。力でボクが中学生に勝てるはずがない。どうすれば勝てるのか、

ボクは必死で考えた。

そうだ、あれだ！

ボクはランドセルの中から秘密兵器を取り出す。

「くらえ！　必殺防犯ブザー！」

ボクは防犯ブザーのボタンを押した。ものすごい音がする。

「行くぞ！」

中学生たちはにげていった。

ボクは防犯ブザーのスイッチを切ると、ヒロキの前に立った。
「ヒロキくん、これにこりてもう弱いものいじめをするのはやめなさい！」
「この声、サトルか？」
「ち、ちがうよ！」
正体がバレそうになったので、ボクはヒロキの前からあわてて走り去った。
心臓がまだドキドキしてる。すごいや。ボク一人で正義のヒーローみたいなことができちゃうなんて。おにいさんが言ったとおり、ボクは生まれ変わったのかもしれない。
今日のできごとをボクは絶対にわすれない。

あの日以来、ヒロキはボクをいじめなくなった。
そして、ボクは今日もハチダーマンＪｒ（ジュニア）として、ハチダーマンと共に
虹ヶ丘のご町内の人々を守るために戦っているのだ。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9629d/

ボクはハチダーマンＪｒ！

2010年10月10日16時38分発行